

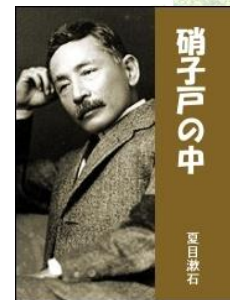
3.11の総括:アフター-FUKUSHIMAの心得

(福島の花:ネモシクナゲ)

いつのまにか今年をふりかえる季節になりました。2011年は皆さんにとって、特別な一年であったことでしょう。

今年3月の地震、津波の災害と、その後の福島第一原子力発電所の事故は、災前・災後と後世に言われるほどの事件であったと思われます。凶らずも FUKUSHIMA という名を世界中に轟かせました。

夏目漱石は「硝子戸の中」で、自分の病気にふれて、あらゆるものは継続中であるといっていました。本当にあらゆるものは継続中です。

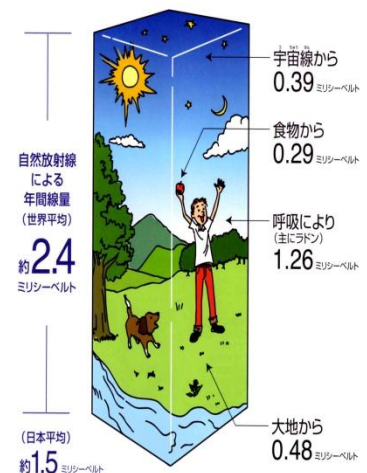


東北の震災も福島原発事故もまさに継続中です。これで終了といった、終わりのない話でしょう。世田谷区で高線量の地域があるという話題になったことは記憶されているでしょう。もっとも、高線量の原因は原発事故との関わりはないと結論されました。放射性物質の処理方法が法律で決まる前から、放射性物質はあったのですから、地中に埋めて処理のされたものが、調べればまだまだでてくるでしょう。東大構内にそうした放射性物質が埋めてあり、東大病院がお役所におこられたなんて事件も数年前ありました。

こどもの通学路や学校で、放射線量をはかってみているかたもおられるかもしれません。しかし、どこでも放射線は測定されますから、以前の量と比べて、どうなったかと言う事がないと、本当は意味のあるデータになりません。そういった放射線を自然放射線というのですが、大地からはガンマ線が出ていますし、宇宙からは宇宙線が絶えず降り注いでいます。さらに意外でしょうが、天然の放射性物質は私たちの体内にもあり、私たちの体からもかなりの量の放射線がでてきます。

日本の自然放射線は1.5ミリシーベルト程度で、世界平均の2.4ミリシーベルトよりかなり少ないのです。米国では約3ミリシーベルトほどありますが、日本と比べてがん患者が多いわけではありません。また、日本の中では西日本の方が自然放射線の量が高いのですが、東日本に比べて、西日本にがん患者が多いわけでもありません。

1ミリシーベルトでも危険だと述べる人もいますが、科学的根拠はありません。1ミリシーベルトの増加は日本が自然放射線の被ばくで世界平均になる程度です。もっともこんなところで、グローバルスタンダードに達してみても何にもなりません。



ドイツで暮らす友人から、ドイツの公共放送の内容を見てくれ、とメールがありました。You tube で見たのですが(日本語字幕がついていました)、福島野菜の汚染について測定している人たちの番組でした。

ドイツでは日本政府が情報をきちんと出していない、あるいは隠しているのではないかと、いう見方が特に強いようです。そのように海外から見られているのも事実です。そもそも専門家が電力会社に偏っていて、政府、役所に専門家がほとんどいないのだと、官庁に勤める友人に聞きました。さもありませんと思えます。

ドイツ公共放送(ZDF-Frontal21) : 福島原発事故とその後(日本語字幕付き)

<http://www.youtube.com/watch?v=6N81oF4Re0c&feature=related>

食品の内部被ばくについてはセシウムが話題になっていますが、カリウム 40 という、自然にある放射性物質のために、私たちの体は 60kg の人では約 3600Bq/秒の放射線をだしています、同じ理由により、牛乳は 50Bq/kg、ほうれん草は 200Bq/kg 程度の放射線をだしているそうです。被ばく量に換算するとラドン、トロン以外の大地放射性核種から約 0.4 ミリシーベルトの内部被ばくを受けています。私たちの体が 3000~4000 ベクレルの放射線を発することを覚えておくと、食品汚染の程度を判断する際の助けになるでしょう。

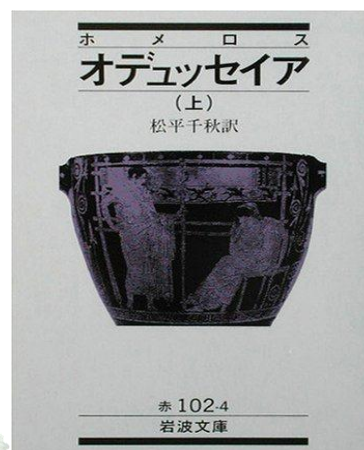


地球が誕生して約 46 億年。生命が誕生して約 38 億年。人間とチンパンジーの共通祖先が生まれて約 500 万年だそうです。その間、地球上に放射線のない期間は一度もありませんでした。生命は放射線とともにありました。わたしたちは福島の事故以前から、放射線に囲まれて生きてきたことを思い出してほしいと思います。過度な心配はばかげていましょう。しかし、なにもかも事故以前と同じというのでは、あんまり反省がないでしょう。

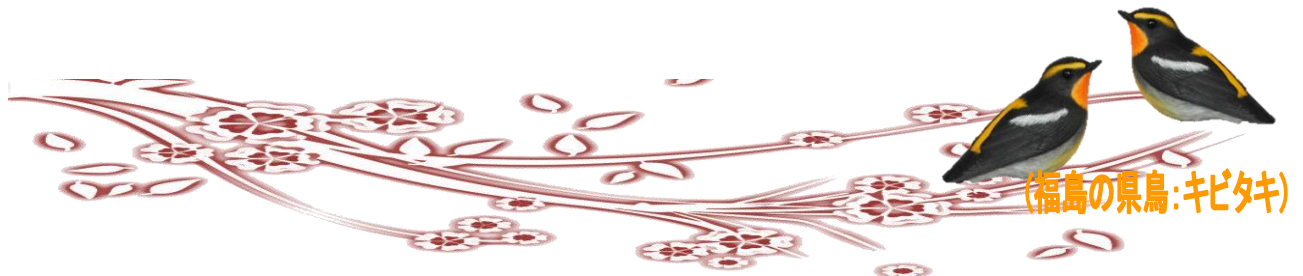
放射線被ばくの遺伝的影響はないということが、長崎、広島原爆放射線影響研究の大事な結果です。福島の子どもたちが将来、そのような偏見にさらされることのないよう、今の大人のわたしたちもしっかりと勉強する責任があります。



原子力発電、全廃という意見もありますが、石油も石炭もなくなっていく世界で、原力発電をどうするのか、大きな岐路にたっていることは確かでしょう。あるいは立ちすくんでいるといったところでしょうか。古代ギリシャの人達は、人間は未来に向かって後ろ向きに歩くと考えていたそうです。(Back to the future。背中から未来へ。あの映画の題名です。ホメロスのオデュッセイアに出典があるそうです)。見えない未来に向かって、後ろ向きに一步一步おぼろげと進んでいく、それがアフター-FUKUSHIMA の私達の姿なのでしょう。



前回に続いてまた硬い内容で、読みにくいものになってしまいました。私に原稿の依頼があったのは読みやすい、楽しい記事を期待されていたこととは思いますが、なかなか意にそえません。次回、機会がありましたら、もっと読みやすい、気楽な内容になるようにしたいものです。 それでは、みなさんにとって来年がよりよい年になるようお祈りしています。



【跋】 一日も早い復旧、復興という願いを込めて、福島県の
県木：ケヤキノキ(昭和 41 年 9 月 28 日制定)を背景に、
県花：ネモトシャクナゲ (昭和 30 年制定)、県鳥：キビタキ
(昭和 40 年 5 月 10 日制定) を鏤めました。この 3 大シンボルは
言わば福島県民の誇りであり、心の拠り所です。3 大シンボル再び、
シャウカステン先生から福島県民への贈る言葉です。

(意匠・池田浩子)

キビタンファミリー

福島県の県鳥キビタキを
モチーフにデザインされた
マスコットキャラクターです
只今飛躍中



シャウカステン先生の作り方



昭和61年 秋田大学医学部卒業
昭和61年 東京医科歯科大学放射線科入局
平成01年 東京医科歯科大学放射線科文部教官助手
平成08年 船橋市立医療センター放射線科医長
平成11年 東京医科歯科大学放射線科文部教官講師
平成11年 大森赤十字病院放射線科副部長
平成17年 大森赤十字病院放射線科部長
現在に至る

やまざき えつお
山崎 悦夫

大森赤十字病院 放射線科部長
東京医科歯科大学 臨床教授
放射線科専門医
核医学専門医
PET 核医学認定医
医学博士